

ひまわり から メッセージ

5 1号

2015.6.15.

西濃園域支援センター
ひまわり

発行人: 中野たみ子



「あなたの息子さんは、二年前のあの時、死んでいても不思議はなかったのです。助かったのは神様のおかげで、奇跡だったのです」何十万人に一人という難病の子をもう娘に。医師は「今は元気に見えますが、両親が思っている程、楽観は許されないのです」と諄諄り返し諭されたそうです。

「家の暴力や暴力で困っています」とか「学校から毎日、トラブルのことやわがままが好きなどしがやうないと言われてつらいんです」とか言われるお母さんが、「中野先生から、子どもに診断名を言ってやつて下さい」と訴えられることもあります。「そんなことは、あるはずがないのに、娘がエッディングドレスを着ている夢を見たんですね」とか、「息子が会社で働いてるんです。夢の中で…」と言わされた方もありました。

自分の子のことを受け容れていいなのではないのです。けれど……と搖れるお母さんの思いに、私は本当に向き合ってきましたが、……と思ひたのです。

その医師のことを私に報告した後で「あなたにいる時私はどうすれば良かったのかなあ……」ぽつりと娘がそう言いました。

「私のせいでしょうか……」「健康に産んでやうがった私が悪いのじょうか……」「私の育て方のせいですか……」

何度も何度もお母さん方がうるさいとばの重みを、私は改めてがみしめてしまいました。母なればこその想いです。けれども病気や障がいを知った時の想いは、育てていく中で少しずつ変化していくきます。

私は改めてがみしめてしまいました。母なればこその想いです。

けれども病気や障がいを知った時の想いは、育てていく中で少しずつ変化していくきます。

最近の出来ごとから

考えさせられたこと、さて

嬉しかったこと



問題点が存在しています。

わが国の福祉はいつか破綻するのではないか……と

私は危惧しています。

前述の施設の施設長の無責任な発言も見逃すことはできないものでした。管理者として「知らなかつた」では済まされません。

先日来、テレビで障害者施設における虐待のニュースが、くり返し放映されています。もちろん、皆さんも、「贅になつて、職員の言動に心を痛められ、怒りがあなまうないと思われた方も多いのではないでありますか。しかも、内部告発があつたにもかかわらず、行政の対応の遅さに、唖然とさせられます。今の一時代に……と思いつつ、差別といつもの根の深さを知らされたというのが実感でした。

かつて福祉は、慈善家といわれる人たちが担つていました。それが、仕事をしての福祉となり、金もうけの手段ともなつてきました。老人施設における様々な事件や障害者もつへへの差別や虐待など、水面下では、もっともと多くの腹立たしい実態があるのだろつと思います。児童に関しても、本当に多くの

ところで、最近私は、うれしいと思うことがあります。継続訪問と称して小・中学校へお邪魔してくるのですが、校長先生とお話しをさせていただくことが多くあります。西濃圏域の子どもたちに対する途切れなく支援していく、こうという試みが各市町で進んできて、サポートの利用が広がってきています。スマイルブックという名称で呼ばれてるのが大垣市や神戸町、他の市町でも各々の名称がつけられて、保護者の方と各機関をつなぐものとして引きつがることもふえているのです。

園から小学校へ、小学校から中学校へと支援のひきがされた子どもたちのその後をたずねて行くので

すが、学校側も受け入れて下さることが多く、校長先生方とお話をさせていただきましたことも多いのです。

先日もある中学校へ伺いました。そして、校長先生とお話しして、びっくりしました。サポートブックはもっていないけれど気になつている生徒さんもあり、100さんは離席はありませんか?などと質問すると、校長先生がどの生徒さんのことによく知つておられるのです。「担任に聞こえます」などと「う返答は一度もなかったのです。校長先生が全ての生徒さんのことご存知で、その生徒さんがどんな時に困っているか、その生徒さんに共感の二とばきかけ、寄り添いながら一緒に乗り越えていこうと支援して下さい」と、伝わってきたのです。

虐待をしていた施設の施設長には、虐待を受けつけていた青年の心の哀しみや苦しみは見えなかつたでしょうか。見ようともしなかつたのでしょうか。施設長として、自分が何をすべきなのか、自分が守るべきは職員ではなく利用者であることをも分かってはいなかつたのだろうと思ひます。人として、一番大切なこと

を置き、やりにしてきた結果、職員同士の自浄作用がなくなってしまったのでしょう。

それに比べて前述の中学校では、校内のチームワークも進んでいるのだろうと思いました。

派遣障がいだけではなく、障がいをもつ子どもたちを支えていくとは、どういうことでしょうか。保育、療育、教育など、子どもとがわっていく職業に全てついて、「育」という文字は、何を意味するのでしょうか。子どもを育てるといつことは、実は自分が育てられていることでもあると、この年令になつて実感しています。

今までのやり方が通じないようなら、二ちらのやり方を試みてみよう。寄り添つみよう。

今までの教える方で分からぬようなら、それは相手(子ども)が悪いからじゃない。どう教えたう分かるのが、二ちら(大人)が工夫してみるとことはできないのか。

←
教科の研究? 派遣のスモールステップは?

子どもが困つてゐる原因は? 気持ちの受け止めは?
私たちにできることは、きっとまだあります。

本の紹介

四

発達障害のある人の

診療ハンドブック

NPO法人
PANDA.J 発行



以前に購入した本ですが、副題に「医療機関で働く皆様へ」とあって、医師や看護師向けに出版されたことがわかります。平成二十年のことです。

私たちがかかる子たちの多くは、「ことばの説明だけでは理解できず、困っている」というものです。しかも、一度「こわい」と感じてしまうと、次からはとても大変になりますから、やはり事前の配慮は必要でしょう。

この本の中に書かれている配慮などについて少し書いてみようと思います。

まず、新しいことが苦手な子が最初から検査や診察にあがえるとは考えにくいですね。ですから、あらかじめ検査室までの通路や室内の見学などは欠かせません。本人の不安が強い場合は、担当者に

も会わせてもらつておくのもいいでしょう。

でも、その前に本人がどんな特性があるのか、知つておくことは、大事なことです。当たり前ですね。

- ・どの位、ことばの理解ができるのか・どの位、抽象的なことばが理解できるか。
- ・理解できる視覚的な手がかりは何か。
- ・どの位先の予定がわかるか。
- ・いくつ位のことが見通せるか。
- ・何を使うと見通しがもてるか。
- ・どのように終わりを理解しているか。
- ・どの位話せるか、話す以外の方法として意思を伝える手段は？

- ・好きなどと、興味のあること
- ・「こわい」とや物、嫌いなことば
- ・苦痛を感じる感覚刺激、リラックスさせる感覚刺激、没頭してしまう感覚刺激
- ・目に入った物や音にどのように反応するのか、周囲の刺激に気が散りやすいか、等々。

子どもたちにとってどの科が大変か、おそらく歯科

の診察は、一番大変だと思われます。何故なら歯科の診察室には、不安がいっぱいです。まず横になつての姿勢の保持、まぶしい光、開いたままの口を保持する、機械の音、水圧、振動など、私たちでも何をされるかと不安になりますが、子どもたちは、もっと不安にちがいありません。

そして、歯科へ行つても治療が受けられず放置

された歯は、う触や歯周病が進行してしまつたり、異食や反すつ、パニックによる歯の破折などといったこともおきる可能性があります。小さい時から感覚の問題があつて歯みがきをさせてくれなくて困ったという子もいましたので、虫歯になりやすがつたり、虫歯になつても痛みを訴えることができずに苛立つたりといったことも、多くあるのかもしれません。

幼少時には、口腔内の病気の予防として、①甘い食べものは時間や食べ方を工夫して摂る、②歯みがきの習慣をつくる、③定期検診や予防処置

などが推しよくなっています。

次に、歯科に行く前に、どんなことが必要でしょか? まず痛みがあるのか、ないのか、痛みの程度がどの位なのか、二つほど言えない場合には、カード等を使って表現してもらつことです。子どもたちが、どの様なコミュニケーションシステムをもつているのかということは、治療に向けての第一歩であると言えます。

次に、何故、治療をするのかを分からせる一事、その手順の見通しも大事です。絵カードなどで、痛い↓病院↓治療↓治つた(笑顔)といったものを使えるでしょう。

そして、治療の順序を、ねる→アーン(口を開く)→歯みがき→むしばきげする→おくすりをつけろといつたように絵や文字で示していくことで、少し不安をやわらげてあげることができるのですが、いじょうか、足を置く位置に足形の絵をおいてもらつたり、音の過敏性のある子には、イヤーマフなどを使ってもらうことも必要かと思ひます。

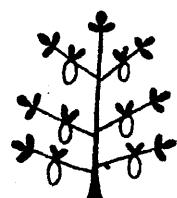
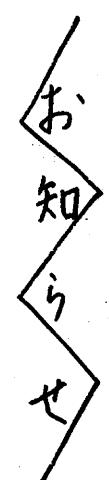
また、歯科には子どもたちの大好きなパソコンなどの機器もたくさんありますから、それらの物に布をかけてもうて余分な刺激が入らないようが工夫も大事です。

障がい児に配慮して下さる歯科もありますが「うちでは無理です」と言われるところもあるようです。又、途中で動くと危険だといふこともあって、全身麻酔で治療されることも多いと思われます。

実際には、病院側も様々な工夫をされている方で、手を動かしてしまった子には、手袋つきエプロンを使ったり、注射の時に「チクッとするよ」といった痛みをイメージさせられるよ、などは使わないよう心にしたり、絵カードや写真で確認できることなどに、スケジュールを見やすい位置においてたり、鏡で確認させたり、意思を伝えるために押すと音声が出るような代替コミュニケーションを使ったり……といったこともあります。

しかし、こういった病院での治療に大事なこと

は、お母さんの日頃の接し方です。自分のお子さんが、どの様な支援があればいいのか、知っておくことです。そして「こわい」という意識を持たせない工夫をしたいのです。好きなキャラクターのぬいぐるみがあれば落ちつける子もいるでしょうし、お母さんがそばにいることで安心という子もいるでしょう。お母さんが「この子、大丈夫かしら……」と心配してしまうと、お母さんの不安な気持ちがお子さんに伝わって、よけいに不安にさせてしまうことがありますから、その点は、お母さん自身の課題になりますが、お母さんねー！



◎ 七月五日、午後一時三十分

加藤永歳先生の「子育てについて」の講演会があります。親さん向けのお話ださうです。

◎ 七月のセンター親の会は十三日です。